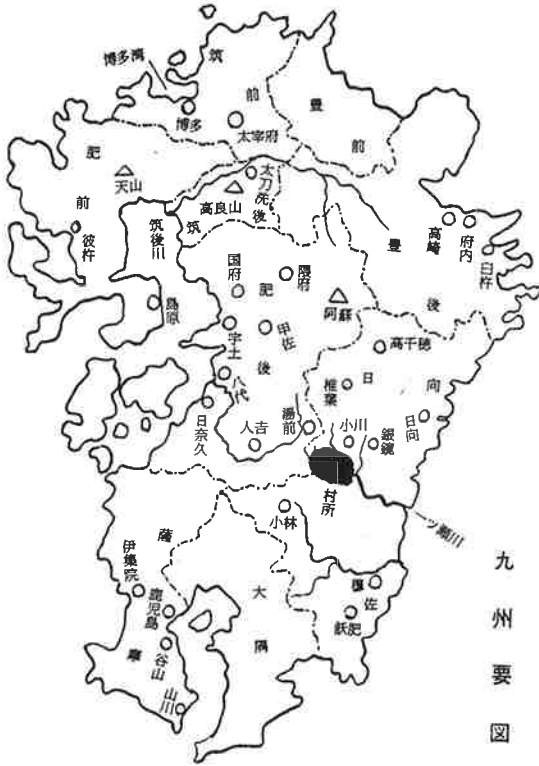


米水津村の出稼(四)

—— 椎茸・木炭・木材の出稼 ——



市野瀬

仁

(会員・佐伯市長島町)

明治十八年(一八八五)八月三十日の『郵便報知新聞』掲載の久松藏典「惨情視察員報告、大分」によれば、「当時すでに『耕漁両業を兼ねた人民』一万人ほどが毎年『営業の余暇』に日向地方へ『椎茸・樟脳・麻・烟草等の物品』をもって行商に出でいたらしい」との記事がある。(丸山武志大分大学経済論文集第三十八巻第二号)米水津村の反物行商人が大勢、宮崎・鹿児島へ行ったことを思い出す。木材関係の出稼ぎについても同じである。

第2表の上記の統計は、大正・昭和初期のものであるが、宮崎県が全国二位の木炭産産県であることに注目したい。宮崎県の中でも

表2 木炭の主要生産町村
(昭和4年・3万俵以上)

町村名	生産 千俵	町村名	生産 千俵
(上日向)		児湯郡	
東臼杵郡		西米良	254.4
北川	186.1	東米良	171.4
北浦	67.7	三財	94.5
北方	88.7	(下日向)	
南方	71.4	南那珂郡	
門川	53.7	大東村	32.6
富高	31.5	酒谷	41.0
岩脇	41.5	北郷	30.0
東郷	238.0	北諸県郡	
南郷	176.0	三股	53.6
西郷	57.4	山ノ口	38.4
北郷	55.2	西諸県郡	
西臼杵郡		小林	107.9
椎葉	39.8	飯野	134.4
七折	89.1	須木	36.4
岩井川	55.3	東諸県郡	
高千穂	36.4	綾	33.5

宮崎県山林会報昭和6年第32号
48～49頁。

表1 各県木炭生産量
(1000万貫以上)

各県名	大正11年 万貫	昭和元年 万貫	昭和4年 万貫
岩手	3,863	2,881	4,321
宮崎	2,045	1,997	2,290
高知	1,812	1,808	1,862
福岡	2,195	1,807	2,466
鹿児島	1,412	1,792	1,962
島根	1,456	1,653	2,407
秋田	1,350	1,274	1,690
長野	1,077	1,250	1,492
岐阜	1,034	1,237	1,427
熊本	1,098	1,210	1,773
大分	1,269	1,158	1,012
新潟	1,504	1,140	1,421
兵庫	1,171	1,099	941
広島	1,082	1,052	1,437
栃木	1,231	1,007	894
静岡	1,142	985	1,332
山形	1,259	979	1,336
群馬	1,261	950	942
山口	1,101	944	1,067
三重		902	1,092
石川	1,013	899	989
青森		870	1,784
福井	1,174	799	962

「宮崎県山林会報」第12号大正13年
28頁、同第32号昭和6年57～58頁。

東臼杵郡の北川・東郷・南郷、児湯郡の東米良・西米良、西諸県郡の小林・飯野が主なる生産地ということがわかる。こうした点に目をつけて、山師はこれらの地へ開拓を始めた。そこで、年代の古い順に開拓者の話を聞いてみよう。

開拓者の話

大分県佐伯市八幡地区戸穴出身の広末徳一は、児湯郡西米良へ住んでいる。彼の祖父宅蔵は、明治二十年頃、延岡市の奥地五ヶ瀬川の上流に沿った地域で、高級木材を製品化して、細島港から大阪へ送り出した。樺・柾・榎・桜・桑・槐。樞等を木挽職人の手により伐り出して製品化した。牛馬の背に乗せて、ある地域から馬車で港へ搬出した。

事業も順調にのび、規模も大きくなった頃、日清戦争が始まり、社会の様相が急変したので、木材業は不況となった。戦後しばらくして景気が上昇し始めた頃

録である。

米水津村宮野浦の九十五歳になる山崎弥一は、二十三歳から二十年間、西米良で椎茸製造をした。大正初期の頃である。彼は椎茸を乾燥する火加減の要領がよく、あちこちから傭われた。大正の末期からコマを原木に打ち込むことにより、多量の椎茸を生産することができ、労力も軽減できるようになった、と語っている。この間、南海部郡の直川村・本匠村の人や、宇目町の榎木長治郎（元町長）や佐伯市木立地区の蟻木などにつきあったと話している。

ここで、各地から遠い米良地方に山師が入山するのはなぜか明らかにしてみよう。

歴史的環境

文亀元年（一五〇一）限府城主の菊池武運が北朝の庄迫により鳥原高木に逃れる際、嫡子

表3 物品輸出入調（明治24年）

		数 量	価 格
輸 出 計			円 10,949.26
茶		2,700貫	556.00
楮	皮材	7,200貫	432.00
木	茸	17,300肩	4,930.00
椎	耳	2,500貫	3,750.00
木	蜜	30貫	30.00
蜂	ニ	24貫	8.40
アンチ		15,752斤	1,242.86
輸 入 計			円 7,627.20
米		180石	1,080.00
麦		3石	12.00
大豆、豆等		3石	12.00
麻		80貫	19.20
呉服糸		1,600反	800.00
綿		800貫	104.00
石	油	50箱	120.00
砂	糖	1,000斤	50.00
乾	魚	320貫	160.00
酒		16石	320.00
焼	耐	162石	4,536.00
醬	油	5石	60.00
小	物	2,000品	60.00
金	物	250品	10.00
陶	器	850品	34.00
漆	器	260品	10.00
素	ん	600貫	240.00

西米良村役場資料より

菊池重為をひそかにこの地へ落ちのべさせた。その後、米良地方一帯（旧東米良・西米良・旧三財村の一部寒川）を領有する殿様となった。時代は下がり、明治維新の版籍奉還の際、自分の所有する山林地をすべて村民に分配して、その生活を助けた。村民はこれに酬ゆるために、菊池氏を永遠に顕彰しようと、昭和八年七月、二十代菊池武夫に菊池別邸を建立した。後、昭和三十一年五月、これを菊池記念館と改称した。

（菊池記念館由来）

菊池武夫は、昭和二年陸軍中將になって退役した後、

表4 貨物輸出表 (明治25年)

	産出	移出	金額	送先	運賃	運搬方法	摘要
椎茸	2,500貫	2,000貫	4,000 <small>円</small>	人吉町	4銭	馬背・人肩	大阪長崎へ送るもの
茶	?	5,000貫	1,000	"	"	"	"
楮	6,000貫	6,000貫	3,000	"	"	"	"
コンニャク	3,000貫	2,200貫	220	本庄村	"	"	宮崎地方へ送るもの
木耳	31貫	30貫	15	人吉町	"	"	大阪長崎へ送るもの
松材	12,000肩	11,800肩	2,360	福島港	5銭	川流	神戸大阪へ
杉材	1,000肩	900肩	225	"	"	"	"
樺材	6,000肩	5,990肩	2,396	"	"	"	"
駄木材	5,000挺	5,000挺	200	"	"	"	"
榎材	850肩	800肩	320	"	"	"	"
アンチモニ	2,400貫	2,400貫	720	"	4銭	馬背・人肩	"
縦板	4,500坪	4,300坪	1,075	"	3銭	"	"
菜種	45石	30石	120	人吉町	4銭	"	人吉地方で消費
炭	800俵	700俵	70	湯前村	"	"	湯前に送るもの
肉類	2,850貫	850貫	425	"	"	"	"

西米良村役場資料より。
運賃は10貫1里の運賃である。

政界に入り、同年貴族院議員となった。なお、武夫は、将来有望な青少年のため奨学金制度を設けた。本匠村笠掛出身の吉良浅五郎長男武正は、西米良村長を五期つとめた。これも、菊池氏の奨学金制度の恩恵により高等教育を受けた賜物であった。

地理的環境

表3・4表にある、明治二十四・二十五年頃の米良村の「物品輸出入調」や「貨物輸出表」を見ると、およそその自然的環境が理解できる。

「米良村は四方を山で囲まれたいわゆる米良荘で、明治年間はまだ封建的経済構造にあった。

湯山峠を越えて湯前―人吉方面へ、また、一ツ瀬川と「おどり街道」―杉安から村所までの尾根道―を通じて宮崎平野に通じていたにすぎず、山越えの困難から生産物移動は著しく阻害されていた。上記の統計によっても日常の加工的生活必需品はほとんど移入されるが、米・焼酎・酒が圧倒的比率（七八パーセント）を占め、移出は木材・椎茸・アンチモニが主軸で差引三千三百二十二年の出超となっている。

当時の搬出方法も、品物により馬背・人背と川流して一ツ瀬河口の福島港に送られた。荷馬車は道路開設まではこの地方に普及しようがなかった。宮崎県の交通網整備は、明治三十年代まで国県道更生期であったが、三十一年には山間道路の計画が着手された。また熊本県の方からも県道改修が進められた。水田はわずか一農当一反八畝、畑は一町七反四畝と大きい。焼畑の農業である。しかし、山林は多く東米良のごときは平均一人当り三四・六ヘクタールもあった。」(宮崎県木炭史)

こうした事情をぬって、米水津村の反物行商人が重い荷を背負って山野を歩いたのだ。明治三十年に百九十三名、三十五年に百四十六名の多数を占めたのもこの頃であった。私達の先代の人々は、かくも強く生きたものかと身のしまる思いがするではないか。

色利の森脇徳茂(七十五歳)は、父の叔父が西米良へ行っていたので、父と共に大正十三年この地へやってきた。船で細島に上がり、日豊線に乗りかえ広瀬駅に下車杉安線に乗り、佐土原を経て終点杉安に降りる。それより五十キロメートルの山道を歩いた。

山を買いこむと茅葺かやぶきの小屋を作る。樫かしの木の多い深山で、下は木が大きいため歩きやすい。山また山で、同僚

の所へ行くのに一日がかりであった。中心地の村所むかしよは五十戸ぐらいあり、各山から日用品を買いに来るので、お互いに知り合いになった。ここでは、椎茸の原木はソヤの木で樫かしはめつたになかった。

山師は重労働である。芋と鱒の干ばしを食っていた米水津人には、めつたにありつけない米の飯が食えたことである。おかずの方は、熊本県の多良木・湯山からくる鯖さばの塩をぬき、刺身にして食べた。それに鯨肉・鱈たらの干物が手に入る。地元の人々の主食は、米まじりの稗・粟であった。山小屋にいる人々の衣・住にしてもお粗末なもので、この地の生活ぶりはひどいものであったという。

備長焼

紀州人の山師は、直径二〇センチメートル、三〇センチメートルの樫かしの木を十字に割って中のシンを取り除いて炭に焼く。それは、シンがあると火になった時にハジケルのを防ぐためであった。そして彼等独得の方式の炭窯で硬度の高い木炭を生産するのである。

「備長式事業製炭は樫のみを求め、その「抜き切り」によって製炭するもので、皆伐方式の製炭に比べより広大な原木供給地を必要とする。このことは、備長炭の高価格によって可能とされる。有名を馳せた紀州備長も明

表5 西米良の転出入

各県名	転出	転入
熊本	242	412
山歌	8	240
大分	2	349
鹿島	12	175
千島	—	145
朝鮮	—	315
高知	—	156
其他	327	570
計	591	2,362

昭和14年、役場資料。

表5の昭和十四年の役場資料の「西米良の転出入」は全く意外の感をもつ。昭和十二年には日中戦争が始まり、国家体制の強

西米良村移住の分布状況

こうした中で、焼きから備長焼をおぼえ、西米良で備長焼専門で成功した人に、佐伯市八幡地区出身の石田儀太郎がいる。また、佐伯市出身野々下善一郎、大分県出身奥口為市等は、大型事業製炭の経営者として、年間二、三万俵程度の製炭を、大正から昭和の初期にかけて販売している。

(宮崎県木炭史)

治期の日本資本主義発展にともなう需要増を和歌山のみで供給しえなくなり、和歌山と同様の暖帯林地帯に属し、地質的にも同系統の臼杵八代構造線の山林が、炭材源に選択されたのは必然であった。こうして、球磨川水系の炭材把握をして紀州資本の進出を可能にした。」

表6 西米良移住の大分県出身者町村名 (西米良村役場 年月日不明)

1	宇佐郡 (院内町)
2	日田郡 (大山村・中津江村)
3	大野郡 (三重町・緒方町・犬飼町)
4	臼杵市 (海添・臼杵)
5	北海部郡 (大在村)
6	津久見市 (日見・日浦)
7	南海部郡 (米水津村・鶴見町・蒲江町 下入津村・上入津村・本匠村 八幡村) 米水津村 (色利・宮野浦)

化に基づき、国民徴用令が施行された年である。こうした時に和歌山県から二百四十名、大分県から三百四十九名の転入者があるのは一体どういう意味があるのだろうか。戦争に関係なく、

まだ人的に余裕があった頃と思う外に考えられない。ともあれ、この年の九月第二次世界大戦が始まったのである。千島・朝鮮からの転入は、国の指示であったのである。この地に発電所が翌十五年に完成している。

さて、表6の大分県内の出身者町村名移住状況を見ると、内陸部・海岸部共にあり、県北・県南共にあることがわかる。南海部郡内に於てもしかりである。米水津村

第7表 佐伯市 南海部郡町村出身者の西米良村移住者

昭和38年改正住民台帳より(西米良役場資料)

氏名	転入月日	出身地	小字名	職業	その他
1 稲村 数馬	昭29. 1. 29	鶴見町大字沖松浦	横野	製炭	昭39. 9 沖松浦転出
2 後藤 豊治	昭 7.	蒲江町楠本浦	上米良	製炭	昭53. 死亡
3 熊 作	昭 7.	同 上	村所	村役場	
4 松下定吉	昭14. 3. 15	西野浦498	板谷	製炭	死亡
5 (妻) ミヤ	同 上	同 上	同 上	同 上	在住
6 (長男) 正人	昭47. 1. 9	同 上	同 上	林業	在住
7 合田 孝	昭10.	竹野浦99	村所	旅館	昭34. 10 死亡
8 (長男) 秀敏	同 上	同 上	同 上	同 上	在住
9 小野 佐市郎	昭18. 3. 10	直川村大字赤木1009	横野	製炭	昭32. 9. 14 死亡
10 岡部 勝美	昭10. 6. 10	同 1909	小川	林業	
11 間 善三郎	同 上	直川村字直見	村所	製炭	死亡
12 間 清作	大 7. 3. 10	同 上	同 上	農業	上米良九電退職後農業
13 間 光信			同 上		
14 吉良 浅五郎	明末	本匠村笠掛	竹原	木材業 雑貨商	
15 (長男) 武正		同 上	同 上	村長5期就任	昭54. 11 死亡
16 典 郎		同 上	同 上	商工会勤務 商業	
17 広末 萬蔵		八幡村大字戸穴6244	上米良	椎茸・木炭	昭23 死亡
18 広末 徳一		同 上	同 上	商業	九電を経て現在
19 井上 宇作	大10. 8. 8	米水津村大字色利	小川		
20 市 男	昭36. 1. 15	同 上	同 上		同 上
21 田尻 九衛門	大10. 6. 2	同 上	村所	同上	定住
22 (長男) 豊		同 上	同 上		
23 (次男) 米一		同 上	同 上		佐伯市へ転出
24 ヒサエ	昭12. 2. 10	同 上	同 上		長男豊氏妻 定住
25 富松 善蔵	昭和初期	同 上	横野		
26 森脇 源太郎	昭和初期	同 上	同 上		帰村
27 森脇 徳茂	同 上	同 上	同 上		同上
28 長船 治平	同 上	同 上	同 上		死亡 妻西都市居住
29 岩木 イツカ	昭28. 9. 1	同 上	同 上		治平氏娘昭34 西都市転住
30 岩木 歳五郎	昭和初期	同 上	同 上		
31 山崎 宇吉	不 明	米水津村宮野浦	竹原		椎茸・木炭約30年前に居住
32 (子) 仁吉		同 上	同 上		
33 (妻) キヌ		同 上	同 上		

においては、色利と宮野浦に限っている。

表7で、佐伯市・南海部郡内の転入者を見ると、米水津村が一番多いのが注目される。いずれも共通していることは、家族ぐるみ、あるいは親族ぐるみで転入していることである。世帯数では、米水津村内の十三名中、七世帯で構成されている。

また、他村が製炭専業に対して、米水津村の転入者は椎茸生産を主体にしていることである。他村の製炭業者は、さき的大型事業製炭の経営者の石田儀太郎・野々下善一郎の焼子として働いていたのではなからうか。「宮崎県木炭史」の中に、紀州・佐伯の焼子を引具した事業製炭は、地域の住民とは異質的生産集団としていたと記録されている。米水津出身者に椎茸生産者が多かったのは、いい椎茸製造の先達がいいたのであろう。

この名簿の中に、宮野浦の益田与平・山崎弥一、色利の御手洗常太郎等が役場資料に名前のないのは、益・正月に故郷へ帰り、寄留届を出していないのが理由である。これら椎茸業者は、西都市の仲介人に売ったり、大阪の問屋に委託販売の方法をとっていた。それだけに、三年なり五年・十年なり寄留し、或は永住して信用を得て可

能であったのである。

以上は、宮崎県の西米良地方の椎茸出稼について記したのであるが、調べていけばいく程、予想外の時代に、予想外の地で働いていることを知った。

色利の塩月駒一（八十九歳）の父宇吉は、明治三十年代に丹波の国（兵庫県）に十人ほどの若者を連れて椎茸山に行っている。また、同年輩の礎田佐助は、熊本県球磨郡の椎山に入り、一財産を築いた。

山田源二の父雅吉、金田正之進・宮本米吉・山田万吉・富松兵太郎等、色利の同志は、明治末年頃、台湾へ樟脳炊き^たにかけている。そして、帰ってまでマラリヤ病に悩み、それが遠因で死亡した人もいる。また一行は奥蕃人、つまり高砂族の人喰い人種の話を持ち帰っている。海を控えた村人の貧困に生きるための行動範囲は、このように広いのである。

（西米良関係資料は、西米良教育委員会の提供による）